

最

近、日本では、リノベーションやコンバージョンの有用性が盛んに議論されている。その背景には、外国人観光客増加に伴う宿泊施設不足や空き家問題などがある。かつて二〇〇三年問題という、オフィス過剰による空き室増加が心配された際に、オフィスの転用が議論されたが、じきに下火になった。近年のブームが一時的なものなのか、あるいはコンバージョン文化を定着させる絶好の機会になるのか。

筆者は、この一〇年以上にわたって、海外のコンバージョン建築の調査を継続し、ヨーロッパ、ロシア、アジア、オセアニア、北米など、約三〇カ国の七〇以上もの都市を訪ね、一、〇〇〇件以上のコンバージョン建築を見てきた。その経験から、思うところを述べたい。

まず、使われなくなった建築をどうするか、壊して新しい建築を建てるのか、あるいは、再利用するのかという議論は、しばしば長い時間をかけて行われている。パリのオルセー美術館は、その好例である。新しい用途をすぐに思い付かずとも、社会のニーズは時間と共に変化するのだから、そのうち良いアイデアが出るというところもある。拙速は避けたいものだ。

コンバージョン可能な既存建築は国によって異なる。例えば、スペインでは、元の用途が病院や煙草工場などの事例が多い。マドリード市庁舎（交通局・都市計画局）や『ゲルニカ』を展示するソフィア王妃芸術センターは、元は大

各 人 各 説

日本にコンバージョン文化は定着するか

首都大学東京大学院 都市環境科学研究科 建築学域 教授

小林克弘

Katsuhiko Kobayashi



病院であった。一時期に数多く整備され、その後使われなくなった施設があればしめたものである。日本で近年話題になる、廃校となった学校は、その好対象になるだろう。話はそれるが、台湾や中国東北部（旧満州）では、多くの日本統治時代の建築が使用され続けている。中国東北部の長春では、帝冠様式建築が中国の行政関連施設になり、日本の城のような建築が、地域の共産党本部に転生していることには驚かされる。これらも建築転生の一例であろう。

コンバージョンが社会的経験として定着していることも重要であろう。ローマでは、トラヤヌス帝のマーケット（現在、展示施設）やディオクレティアヌス浴場（現在、教会と国立博物館）など、古代ローマ時代の建築が転生して、今も使用され続けている。時代や国の体制が変わっても、使える建築、残したいと思う建築は、あの手この手で、使い続けるといふ経験や価値観が、社会全体で醸成することも重要である。

忘れてはいけないのは、保存活用か、壊すかという二者択一しかないわけではないということである。一部は壊す、増築を行うといった行為を伴う多彩なコンバージョン手法がある。海外では、そうした事例も多い。

広い視野で見ると、様々な可能性が見えてくるのではないか。近視眼的に進めるのではなく、じっくり腰を据えて、コンバージョンの可能性を考えてみる良い機会であろう。